

【書評】松下幸之助『人間を考える——新しい人間観の提唱・真の人間道を求めて』

松下幸之助の新しい人間観と真の人間道

——「万物の王者」をめぐる解釈の転回

棚次正和

常識的な世界観を真正面から否定する視点

どこを読んでも、同じような印象を受ける文章である。奇をてらわず、肩に力を入れず、平明な文体で淡々と自説が述べられている。その印象をよりいっそう強めるのは、要約や小括として類似の表現がフーガのように繰り返されるからでもある。淡々と自分の主張が繰返されるため、読んでいるうちに、その穏やかなリズムの文章の連続に感覚が麻痺して、ときに何か強烈な印象を与える言語表現がほしくなる。そのような、いわば真水のような文体なのだ。これはこれで、しみじみと味読することができる。

この真水のような文体で説かれている内容は、一見すると常識的な見解とも受け取られかねない。しかし、ここで表明されているのは、常識の範囲内に収まる内容ばかりではない。むしろ、現代人の多くが漠然と抱いている世界観を真正面から否定するような視点が含まれている。松下幸之助が提唱する「新しい人間観」は人間に関する認識論にかかわり、「真の人間道」は、その認識を現実生活で実

現するための実践論にかかわっている。認識と実践の両輪を有効に活用させることで、現実の共同生活に「物心ともにゆたかな調和ある繁栄、平和、幸福」を実現することが狙いである。

では、「新しい人間観」のどこが新しく、「真の人間道」のどこが真であるのか。その両輪の「新しさ」や「真」の中に、常識的な見方を根本から突き破る発想や思想の因子が存在するのではないかと推察される。

松下が提唱する新しい人間観は、一言でいえば、「人間は万物の王者である」と見なすものである。従来、人間は有限で弱い存在であると考えられてきた。「所詮、人間とは弱いもの」、こうした人間観が、地球上のそこかしこでため息混じりに呟かれ、個々人の意識野の大半を占拠している。これに対して、松下は「人間は万物の王者である」と説く。その「王者」の意味だが、「支配・君臨する」ということは、自然の理法にもとづいて、万物に順応するということ①です。いいかえれば万物にしたがいつつ万物を導き生かすこと②だと言明している。「万物の王者」という言葉から受ける威風堂々たる印象とは裏腹に、王者とは「自然の理法にもとづいて、万物に順応する」こ

とを指すのである。「万物の王者」は、「自然の理法」に基づいてこそ実現するのであり、「万物の王者」に対しては「自然の理法」の方がむしろ王者なのである。

ちなみに、漢字「王」は「戊えつ（鉞まさかり）の刀部を下にしておく形」^③を示している。鉞は王位を示す儀器であり、王とは天地人の三才を貫いて、これを統撰するものと考えられていた。

「万物の王者」は、「万物の霊長」を連想させる表現である。「霊長」の語を避けたのは、霊長類や霊長目という分類学的な意味合いが混じるのを嫌ったためかもしれない。通常、「万物の霊長」は二重の意味で用いられている。一つは、人間自身の驕りや慢心などに対する自戒の言葉の前振りとして用いられる。たとえば、「人間は万物の霊長と言われているが、実は……」というように。いま一つは、文字通り神仙にも等しい霊妙不可思議な能力を有する存在を指す用法である。「万物の王者」についても、おそらく「万物の霊長」と同様の解釈の揺らぎが生じるだろうと思われる。

さて、「自然の理法」であるが、宇宙に存在する一切のものは、つねに生成し、たえず発展しており、「そのような万物の生成発展こそが、この宇宙の本質であり、自然の理法である」^④。万物が生成発展すること、これが自然の理法である。「生成」とは現象世界において事物や事象として生じたり消滅したりすること、「発展」とは現象世界において事物や事象が生長や完成の度合いを増大させることである。

ここには進歩や進化に対する素朴な信頼が見て取れる。人類の進歩

や進化も含め、宇宙全体、自然全体が生成発展するというのである。このような自然観は、近現代人が抱く自然観としては比較的珍しい部類に属するだろう。というのも、彼らの多くは全体を部分の集合と見るような要素還元主義的で機械論的な自然観に馴染んでいるからである。それに比べて、松下の自然観は、むしろ古代日本や古代ギリシアなどで流布していた自然観を髣髴ほうふつとさせる。

たとえば、古代日本の神道思想に窺える「むすひ」（産霊）や古代ギリシアにおける「ピュシス」である。「むすひ」の「むす」とは、苔むす・草むすなどの表現からも明らかのように、「自然に成る」という意味である。「むすひ」はそのように自然に「ひ」（霊・魂）が「むす」（自成する）ことである。また、ピュシス（*physis*）は、第一義的には人間に対向する客体的な世界（自然界）ではなく、人間をも含めて宇宙の森羅万象をそれらたらしめている根源的な自然本性や生命力を意味した。ピュシスはピュエスタイ（*phystai*）という動詞（生成する）から派生した単語であり、神々さえも世界に登場したり、世界から退場するのは、ピュシスによるとされていた。そのギリシア語ピュシスのラテン語訳がナトゥーラ（*natura*）【英語natureの語源】に他ならない。「むすひ」にしろ、「ピュシス」にしろ、その基礎をなすのは「生きた自然、生命に満ちた自然」であって、けっして「死んだ自然、生命のない自然」ではない。松下の自然観は、そうした古代人の自然観に繋がるもののように見えるが、新たに「発展」の要素が付け加わっている点に特徴がある。

この万物が生成発展することが自然の理法であるという認識は、科

学的な実証に裏付けられた知見というよりも、直観に近いものに違いないと思うが、こうした自然の「理法」に即応する形で把握されているのが、人間の「天命」である。天とは中国思想では一般に絶対的な超越者（天帝、上帝）を指し、天命とはその天が人間に与えた使命である。松下は、「人間には、この宇宙の動きに順応しつつ万物を支配する力が、その本性として与えられている」と見ている。「天」と「地」という両極（陰陽二元）の間にあって、天空を仰ぎつつ大地を踏みしめて立つのが「人」である。

元々、漢字「天」は「大は人の正面形。その上に頭部を示す円を加えた形で、人の顛頂を示す」ものであり、「地」の初文「墜（墜）」は「神霊の陟降する神梯」（旨）と「その前に土（社）を設け、その社神に供える牲」（家）との会意文字であることから、「神霊の降下するところ」を指す。人体の天（頭部）は、明らかに宇宙の天（天帝）に通じている。「人」は「人の側身の形」である。この人と人の間柄が人間と呼ばれる世間である。

「人」間の「天」命について言及するとき、松下は無意識裡に天地人の三才を想起していたことだろう。それゆえ、「天命」という表現には、宇宙論的な把握と感覚が凝縮されているわけである。松下が唱導する新しい人間観には、一見すると、超越的な要素が欠落しているように思われるが、子細に窺うと、自然の「理」法や人間の「天」命という表現それ自体に、すでに超越的なものが示唆されているのである。神仏への直接の言及はほとんどなく、ときに宗教に関して控えめに語られるだけにしても、万物の究極原理に対する眼差しはけっして

失われてはいない。

容認・処遇・礼

ところで、人間道は、容認・処遇・礼という三つの要素を含むとされる。「人間万物いっさいをあるがままにみとめ、容認するところからはじまる。すなわち、人も物も森羅万象すべては、自然の摂理によって存在しているのであって、一人一物たりともこれを否認し、排除してはならない。そこに人間道の基がある」。全ての物事は、存在意義や存在理由があるがゆえに、現に存在しているのであるから、まずはその厳然たる事実を事実として認めねばならない。好ましからざるもの（戦争、犯罪、ウイルスなど）も現に存在することをいったん認めた上で、その撲滅を急ぐよりも、上手く導き生かそうとする思想である。現状をいったん認めた上で、万人万物が共存共栄する道を進もうとするのである。しかし、そのようなことが、はたして可能なのかという疑念が起きるが、これは松下の抗いがたい直観である。

思うに、万人万物の容認には、その大前提として自己自身の容認が含まれているはずである。自己の存在に対する深い肯定、換言すれば、「万物の王者」としての自己認識である。万人がそれぞれに万物の王者であるということであるから、通常の意味での王者ではない。人間は「崇高にして偉大な存在」であるとも言われる。これらの表現が宿す意味は、どのように解釈されるべきだろうか。それが正に問題である。

既述したような認識上の容認が行為の場面で活かされる必要があるのは、断るまでもない。というよりも、知行合一でなければ、真の意味での知ではない。さて、松下の行為論は、「処遇」と「礼の精神」の二つを含んでいる。「いつさいのものの天与の使命、特質を見きわめつつ、自然の理法に則して適切な処置、処遇を行ない、すべてを生かしていくところに人間道の本義がある」¹¹。処遇とは、「森羅万象あらゆるものごとに対する処置、対処という広く深い意味を持つもの」¹²であり、礼とは「日常的な礼儀作法だけでなく、宗教で教えるところの慈悲とか愛の精神、あるいは感謝とか謙虚、寛容といったゆたかな心も含まれている」¹³とされる。それは儒教でいう五徳、つまり仁・義・礼・智・信の中の礼というよりも、武道や芸道で重視される礼の精神に近いものと推察される。「処遇」が万人万物に対して人間が取る心的態度や構え一般を指すとすれば、「礼」とはむしろ特定の共同体で公認された行為規範としての個々の礼儀作法を指す、とさしあたり理解できるだろう。

処遇については、「見方によってはお互い人間が生きていく上で考へること、とる態度、行なうことのすべてが処遇の実践として考えられ」¹⁴と言われていることを考慮すれば、それは世界に対して自己が取る心的態度一般としてマルチン・ブーバーが語った根源語に似たものではないか。ブーバーは、その態度を自己が世界を語る、その語り方に見て二種類の根源語「我―それ」(Ich-Es)と「我―汝」(Ich-Du)を区別したのである。礼の「精神」を基盤に「礼」の形が具体化すると考えれば、「処遇の実践」は必ずしも冗長な表現ではない。礼の

「精神」は、「礼」を生み出す母源として意味的には「処遇」とほとんど重なり合うからである。この処遇の際に働く指導理念は、「適材適所」あるいは「万物善用」と要約できる。

さてそれで、礼の精神は別の箇所でも「いつさいのものに対して感謝と喜びの心をもつとともに、その心を素直にあらわしていくということ」¹⁵とも解説されている。この感謝・喜び・素直は、宗教が教えるところの「慈悲とか愛の精神」とどのように結びつくだろうか。

「慈悲とか愛の精神」は、実は宗教の教えの根幹をなすとともに、およそ人間関係の土台となるべきものである。言うまでもなく、人間関係は自他の不二性^{ふじせい}と不二性^{ふにせい}に基づいて織り成される。自は他ならず、他は自ならず、両者はどこまでも異なる(不二性)。他者は、自己の世界には吸収できないもの、どこまでも異質で疎遠なものとして在り続ける。そのような不二なる自他の間に、なぜ慈悲(不二性)が不可欠なのか。この問いがかかわるのは、自他の存在を根底で支える存在根拠である。小説『人間の大地』の中で、サンテグジュペリは、次のように登場人物に語らせている。「愛すること、それは互いに見つめ合うことではない。一緒に同じ方向を見つめることなんだ。この場合、『同じ方向』とは同じ生命の根源に向かつてという意味に解される。これは生命の根源に対する志向性、キリスト教の脈絡では「神への愛」と言われてきたことである。

「神への愛」を垂直軸に立ててこそ、「隣人愛」も水平方面に広がっていく。垂直方向での「神への愛」と水平方向への「隣人愛」、この縦軸と横軸が十字に交差する地点に人間は立っている。こうした十字

交差に見られる愛の構造は、非連続の連続（すなわち不二）である。自他は徹底的に非連続だが、その非連続は等根源的な絶対的なものへの眼差しを共有することで、一種の連続性を存在の内奥で回復するものとなる。愛とは、その絶対になるものとともに本有している自己と他者への認識を深めることであり、またその認識を行為の形で他者に表現することである。

仏教でいう「慈悲」は、衆生に対して仏・菩薩が抱く心で、具体的には拔苦与楽、つまり苦を抜くこと（悲）と樂を与えること（慈）である。それは絶対者・覚者から注がれる慈愛であるから、「神への愛」とは方向が逆である。また、神道でいう「神ながら」は、唯一絶対の存在である神の御心のままに生きることを意味するから、「神への愛」と同じ方向性を有している。

感謝・謙虚・寛容

では、「ゆたかな心」に数えられた実践徳目や感情についてはどうか。

「感謝」とは受け止め直すことである。それは狭い実存的意識から抜け出し、宇宙の広がりの中で自分が置かれた位置を再確認することと表裏一体である。自らの位置を再確認するとき、「有り難い」という感情が湧き上がる。この実存的有り様が当たり前ではなく、有り難い（きわめて稀な）ことに気づくのである。細胞一個が生まれる有り難さを、村上和雄氏は、一億円の宝くじが連続して百万回当たるよう

な確率に匹敵する有り難さだと指摘している。それが人間は六〇兆あるのである。この有り難さは奇跡的である。それゆえ、日常茶飯事、たとえば「茶碗一つにしても、この心がまえを持つか持たぬかで、扱い方が非常にちがって」¹⁶ ことよう。

「謙虚」は、いったん自分を虚しくして他者と接するということである。自分を無にして他者と向かい合い、出会うものの前で頭を下げる（礼をする、我を折る）こと、この「謙虚」の根底には、万物の存在意義を容認する本質直観が働いているはずである。

また、「寛容」は、多様な他者の存在を容認する態度であり、そこに不可欠なのは多様性を包摂しうる根底への眼差しである。

上述したように、「礼の精神」にかかわる実践徳目や感情は、要するに等根源的に絶対になるものへの志向性や直観に基づくものと言える。松下は、「人間道とは容認と処遇と礼との三つの柱によって成り立っている」のであり、「礼の精神は先の二本の柱を支え、これをスムーズにはたらかせる潤滑油の役目をも果たすもの」と¹⁷ 見ている。

また、人間道を正しくあゆむ上でもう一つ大事な心構えは、「衆知によって人間道をあゆむということ」¹⁸ であることも指摘している。「人間道をして真に価値あらしめるためには、正しい学問研究の興隆がなければなら」¹⁹ ず、しかも学問の進歩が「過去の衆知の累積」によるものだとすれば、衆知を集めることは、集団が形成した思考・想念の共磁場から、いわば集団の叡智を集めて抽出することであり、またその営みを通してそこに新たな思考・想念の共磁場を編成し直すことである。この集団の叡智の結集・抽出という営みによって、人間道は学

問的な裏付けを与えられつつ、他方、諸々の学問も人間道の基本理念に依拠したものとなるのである。衆知は衆愚ではなく、共磁場における個々人の体験的叡智の結集に他ならない。

松下は、本書の「新しい人間観の提唱」の中で「人間の共同生活の意義」や「衆知による日本のあゆみ」に触れて、力の秩序（政治）と精神的な秩序（宗教）が共同体の二つの柱であること、政治には共同体をより高いものにしていく責務があることなどを論じている。また、「真の人間道を求めて」の補章や付章においても、日本の歴史を回顧しながら聖徳太子の十七条憲法や豊臣秀吉などの戦乱の武将像に言及している。

人間の自己理解の深さを測る「平凡な非凡の書」

冒頭で触れたように、本書には常識を覆すほどに「新しい」「真」の視点が確かに含まれていると思う。それは表面を撫でるだけの読解では、うっかり見落としてしまうものだ。「新しい人間観」や「真の人間道」の提唱を松下が「個々人の意識革命であり、常識革命」と呼ぶのは、従来の常識を破るような見解が含まれているためである。ただし、それが顕在化するためには、一種「解釈の転回」を俟つ必要がある。その解釈の転回をもたらす鍵概念となるものこそが、私見では「万物の王者」に他ならない。

最後に、その「万物の王者」をめぐる解釈の転回について触れておきたい。「万物の王者」は、揶揄的にも字義通りにも解釈可能である。

しかしながら、ここで真に問題とすべきは、現実か本質かという解釈の対立ではない。むしろ、「人間」概念が持つ幅の広狭こそが問われねばならない。「万物の王者」に対する解釈は、人間の自己否定・現実直視の側面と、文字通りの人間の自己肯定・本質直視の側面とに分裂するはずである。その解釈の分裂によって己が身が引き裂かれることが、求められているのではない。そうではなく、逆にその分裂そのものを包み込むような存在振幅に現になること、より正確に言えば、すでにそのような存在振幅であることに気づくことが、求められているのである。

松下の「新しい人間観」や「真の人間道」は、先哲諸聖の教えを受けながら、「私の一種の体験、直観にもとづく」ところに従って議論を組み立てたものである。松下がそれを「世界人類普遍の哲理」と言い切る背景には、普遍的な視点によって組み立てられた理論構成であるという密かな自負があることが読み取れる。

「万物の王者」に対する解釈が人間の現実存在に限局されるとき、人間はその実存的構造に不可避的に諸制約を被った有限で相対的な存在として捉えられる以外にはない。だが、人間を捉える眼差しが本質存在をも視野に入れて、人間の存在構造全体を俯瞰するとき、「万物の王者」は、従来とは全く異なる新たな光の下で解釈し直されることになる。そこに浮かび上がるのは、絶対と相対（あるいは本質と現実）の両面を同時に具有している人間の全体像である。天地人の三才を用いてその全体像を描くならば、「天」と「地」の間に立つ「人」の存在構造（人体）そのものの天（頭部）・人（胸部）・地（腹部）

が凝縮されている。相對（現実）は天地人の形で現象界に具現するが、絶対（本質）は現象界を超絶しつつ、なお「天」としても表象される。こうした人間が本来有する宇宙論的構造が、明瞭な輪郭線とともに現われるであろう。「万物の王者」の本来の面目は、そのような宇宙論的意義を担っているはずである。また、自然の理法に従って万物を善用する「万物の王者」においては、それ自身の働きがそのまま自然の理法の働きと一体化しているに違いあるまい。「素直な心」が称揚される理由は、何よりもそれが自然の理法に無媒介に直通するからである。

「新しい人間観」や「真の人間道」は、上述したように、「万物の王者」の解釈次第で、平凡な当たり前の表情も見せるであろうし、逆にまた古くて新しい真理（世界人類普遍の哲理）を告げるものともなるであろう。こうして、本書が提示する「新しさ」や「真」を見出す作業は、読者自身の人間理解に依存していると言えるのである。「人間とは何か」、これは世界人類普遍の問いである。この問いが解決しないかぎり、あるいは少なくともこの問いが心中で落着かないかぎり、人は天空を背に大地に確かな一歩を踏み出すことができないのではないのか。そう考えるとき、本書は人間の自己理解の深さを測る「平凡な非凡の書」のように見えてくる。

【注】

- (1) 松下幸之助『人間を考える——新しい人間観の提唱・真の人間道を求めて』PHP文庫、一九九五年、三六頁。

- (2) 同前、一八頁。
 (3) 白川静『字統』平凡社、一九八四年、六二頁。
 (4) 前掲『人間を考える』三九頁。
 (5) 同前、一二三頁。
 (6) 前掲『字統』六二七頁。
 (7) 同前、五八六頁。
 (8) 同前、四七九頁。
 (9) 前掲『人間を考える』一二二頁。
 (10) 同前、一四頁。
 (11) 同前、一二一頁。
 (12) 同前、一二四頁。
 (13) 同前、一二四五頁。
 (14) 同前、一五六頁。
 (15) 同前、一六二頁。
 (16) 同前、一六五頁。
 (17) 同前、一六三頁。
 (18) 同前、一六六頁。
 (19) 同前、一六八頁。
 (20) 同前、一九三頁。
 (21) 同前、二二五頁。
 (22) 同前、一九四頁。

(たなつぐ・まさかず 京都府立医科大学教授)